



フォーラムブックフェア

# 今読みたい 文学！

私たちを取り巻く構造・呪い・からの解放

2021年7月作成 横浜市男女共同参画センター

韓国の文学、エッセイ、絵本、人文書などここ数年次々と刊行され、日本国内でも40万部を売り上げる作品も登場するなど、K（韓国）文学人気が高まっています。ベストセラーになった『82年生まれ、キム・ジヨン』訳者の斎藤真理子さんにおすすめ本についてコメントをいただきました。

『こびとが打ち上げた小さなボール』著：チョ・セヒ／訳：斎藤真理子 河出書房新社／2016年  
1978年の刊行以来、驚異的なロングセラーを続けている有名な小説。急速な都市開発の中で追われる、貧しく障害を持った「こびと」一家と、公害都市の工場で組合を結成して奮闘する若者たちの姿を通して韓国現代史の痛点をあぶり出すと同時に、幻想的な描写で人々の痛みと絆を繊細に描き出しています。なぜ韓国ではこの本が熱烈に読まれつづけているのか。それを考えることが、私たちの社会を考える糸口にもなりそうです。

『フィフティ・ピープル』著：チョン・セラ／訳：斎藤真理子 亜紀書房／2018年  
タイトル通り50人（本当は51人）の物語がからみあい、面白さと切実さがぎっしり詰まった奇跡のような1冊。ある街の大学病院を中心に、そこに関わる幅広い人たちを丁寧に描いており、読むと必ず自分に似た人、友達になりたい人を見つけることができます。韓国の普通の人たちの喜びと悲しみ、そして課題がよくわかる本。日常にぴったり寄り沿うフェミニズム視点も魅力的。

『82年生まれ、キム・ジヨン』著：チョ・ナムジュ／訳：斎藤真理子 筑摩書房／2018年  
思ってもみなかったほど多くの読者の皆さんに愛された本です。1982年に生まれた「キム・ジヨン」という平凡な名前を持つ女性主人公が、子供時代から進学・就職・結婚・出産という節目節

目で体験した女性としての壁を淡々と描いたもの。とても淡々としているので、読む人自身の物語を無限に引き出してくれる不思議な小説です。チョン・ユミ、コン・ユ主演で映画にもなりました。

---

『すべての、白いものたちの』著：ハン・ガン／訳：斎藤真理子 河出書房新社／2018年

2016年にマン・ブッカー国際賞を受賞し、今や韓国文学の「顔」ともいえる女性作家ハン・ガン。「白いものたち」に捧げるオマージュを集めた散文詩風の内容です。生まれて間もなく亡くなった姉の存在と、かつてワルシャワで、また光州で死んでいった人々の姿が連なり、繊細に、まだ壮大に、生と死のかたちを余すところなく描き出しています。同じ著者が光州事件を描いた渾身の長編小説『少年が来る』もおすすめ。

---

『ディディの傘』著：ファン・ジョンウン／訳：斎藤真理子 亜紀書房／2020年

今最もラディカルな作家ファン・ジョンウンが、2016年の「キャンドル革命」を舞台にして書き切った力作です。「少数者にとって革命とは何か」を一つのテーマに据えて、切実な2組のカップルの愛の物語と、韓国現代史の振り返りと、膨大な読書録とを混ぜ合わせたような特異な書物ですが、文体に類い稀な力があり、めったにない読書体験ができます。読者にも非常に強く支持された作品です。

---

『となりのヨンヒさん』著：チョン・ソヨン／訳：吉川凧 集英社／2019年

韓国の女性作家の書くSFは、SFが苦手という人にもぜひおすすめです。物語は時空を飛びこえて展開されるけれど、そこに登場するのは今を生きる私たちと全く同じ喜怒哀楽、悩み、希望を持つ人々。そして不思議にあたたかい。フェミニズムの視点も生きており、未体験ゾーンに誘ってくれる魅力的な小説集です。

---

『娘について』著：キム・ヘジン／訳：古川綾子 亜紀書房／2019年

離婚して一生けんめい育てた自慢の娘が、ある日同性の恋人を連れて実家に舞い戻ってきた……。リベラルを自認しながらも、娘がレズビアンであることを認められないお母さんの葛藤が驚くほどまっすぐに描かれ、読む人も自らを振り返らずにいられません。少数者の権利を求めて闘う娘たちの姿も印象的。フェミニズム文学に続く韓国文学の新しい動力源、「クィア文学」の代表作でもあります。

---

『悲しくてカッコいい人』著：イ・ラン／訳：呉永雅 リトルモア／2018年

シンガーソングライター、映像作家、エッセイスト、イラストレーターとマルチな活躍で日本でも多くのファンを持つイ・ラン。ポップでまじめでユーモラスで、ときに胸に突き刺さるエッセイの数々は、他では味わえない独特の自由さが満ち、何度読んでも発見があります。

---

『彼女の名前は』著：チョ・ナムジュ／訳：小山内園子+すんみ 筑摩書房／2020年

『82年生まれ、キム・ジヨン』の著者が、多くの女性に取材して書いた28の物語から成る短編集。キム・ジヨンは声を上げられないままでしたが、「そこから半歩でも前に進むためにこの本を書いた」と著者が語っています。その通り、一步踏み出す小学生から70代までの女性たちのドラマが詰まって熱を放っています。

---

『わたしに無害なひと』著：チェ・ウニョン／訳：古川綾子 亜紀書房／2020年

英語タイトルは「Someone who can't hurt me」。大切に思っていた人を傷つけてしまった体験など、人間関係の辛いひとこまひとこまを注意深く掘り下げた非常に訴求力のある短編集。辛い記憶を描いているけれど、なぜか一呼吸置いて生きることに向きになれる読後感があります。

---

『女の答えはピッチにある』著：キム・ホンビ／訳：小山内園子 白水社／2020年

会社員のかたわら女子サッカーを始めたらサッカー愛が止まらなくなって書き下ろされた、「3ページに1回爆笑させられる」面白ルポ。記者解説によれば『キム・ジヨン』以後に広まったテーマの一つが「女の身体」であり、本書はその代表格だそう。スポーツの世界につきもののマンスプレイングには「私のキックは、ゆっくり、優雅に、あなたたちの『コーチング』を越えるのさ！」と一矢報いる鮮やかさ。

---

『完全版 韓国・フェミニズム・日本』編：斎藤真理子 著：チョ・ナムジュ他／訳：小山内園子他 河出書房新社／2019年

2019年に創刊86年ぶりの3刷を記録した文芸誌雑誌『文藝』の特集「韓国・フェミニズム・日本」をもとにした本。日韓両国の作家たちの短編小説、多彩な顔ぶれによるコラム、対談、ブックガイド、韓国文学を楽しむためのキーワード集など盛りだくさんの保存版です。

---

『小説版 韓国・フェミニズム・日本』 河出書房新社／2020年

2019年の『文藝』の特集「韓国・フェミニズム・日本」をもとにした本で、こちらは日韓両国の作家の短編に特化し、新たな書き下ろしも加えました。『82年生まれ、キム・ジヨン』の作家

チョ・ナムジュの快作「離婚の妖精」から覆面作家デュナのフェミニズム SF「追憶虫」まで幅広い作品が楽しめます。

---

『亡き王女のためのパヴァーヌ』 著：パク・ミンギョ／訳：吉原育子 クオン／2015年

韓国文学界最大の異端児ともいえる作家、パク・ミンギョ。『ピンポン』などぶっとんだ想像力で面白すぎる作品をバンバン発表していますが、この本は80年代の冬のソウルを舞台にした、優しさに満ちたラブストーリーです。同時にルッキズムという誰にとっても無縁でない切実で繊細な問題に深々と切り込んでいるのが特徴。女性作家の紹介が多い韓国文学ですが、このパク・ミンギョ、キム・ヨンス、チョン・ミョンガン、イ・ギホなど近年翻訳されている男性作家たちの作品はいずれもマッチョさとはかけ離れた魅力を持っており、注目してほしい。

---

『ハンゲルへの旅』 著：茨木のり子 朝日新聞社／1986年

韓流の「か」の字もなかった1976年に韓国語の勉強を始めた詩人 茨木のり子のエッセイ集(1986年刊)。人と言葉への思いにあふれた小さな1冊は、一度ページを開いたらやめられない広さ、豊かさに満ちています。浅川巧、尹東柱に寄せた二編は必読。同じ著者の翻訳詩のアンソロジー『韓国現代詩選』（花神社、1991年、読売文学賞）もぜひ味わってください。

---

『きらめく拍手の音——手で話す人とともに生きる』 著：イギル・ボラ／訳：矢澤浩子 リトルモア／2020年

「Children of Deaf Adults」=CODA（コーダ）。コーダとは、ろう者の両親のもとに生まれた「聞こえる」人たちのこと。映画監督でもあるイギル・ボラはコーダの一人で、「私は自然と、なるべくしてストーリー・テラーになった」と明かしています。そんな、二つの言語と二つの文化を行き来しながら生きるコーダたちの世界は本書と同タイトルのドキュメンタリー映画にもなりました。言葉とは何なのか考えたい人に新しい扉を開けてくれる大切な1冊。

---

『夢を描く女性たち——イラスト偉人伝』 編著：ボムアラム／訳：尹怡景 タバックス／2020年

「教科書に出てくる偉人は何で男性だけ？」そんな疑問から韓国のフェミニズム出版社が作った楽しく美しい本。ナイチンゲールからグレタ・トゥーンベリまで、世界各地の様々な分野で活動した女性たち（生きている人も）の軌跡を文とイラストで紹介しています。日本版では新たに6人のイラストレーターを起用して石牟礼道子などのページを増補。

---

『家（チベ）の歴史を書く』著：朴沙羅 筑摩書房／2018年

私の家族はいつどのように、どうして済州島から大阪へとやってきたのか」――在日コリアンで社会学者の著者が、自分の家族たちに聞き書きをしてまとめた本ですが、その語り口が無類に面白い。歴史的経験を語る/聞くという行為のわけのわからなさ、とまどい、たゆたいそのものがテーマといってもいいかもしれません。ユニークな語りで、個人の中にたたまれた歴史の深さを教えてくれます。

---

『乳房のくにで』著：深沢潮 双葉社／2020年

一気読み必至のサスペンスフル長編小説。母乳に代表される「母性」というものに翻弄された三代の女性たちの痛みとリベンジと希望が交錯し、負けない、屈しない女の肖像が胸に残ります。「わたしたち女性は、国家の乳母ではないんです」という決め台詞も鮮やか。『海を抱いて月に眠る』『緑と赤』など、同著者が在日コリアンの生き方を描いた作品もお勧めです。

---

『海女たち――愛を抱かずしてどうして海に入られようか』著：ホ・ヨンソン／訳：趙倫子・姜信子 新泉社／2020年

「わたしの体には水のうろこがある／わたしの体には消えた道がある／探してごらん ザリガニ岩のように縮こまったこの体を」……詩がとても愛される国・韓国では毎年豊かな詩の世界が更新されていきます。この1冊は済州島の海女の暮らしと歴史、誇り高い闘いがテーマ。素晴らしい翻訳と丁寧な編集でその醍醐味がじっくりと味わえます。

---

『無情』著：李光洙／訳：波田野節子 亜紀書房／2005年

1917年に書かれた韓国文学初の近代長編小説ですが、意外や意外、韓流ドラマ級の面白さです。主人公のインテリ男性の情けなさ・優柔不断さと、澆刺として切実な思いを持つ女性たちの対比がとっても面白い！ 翻訳の素晴らしさもあって、古い小説だということがほとんど気になりません。物語を楽しんだ後は、著者・李光洙の数奇な人生について知ってください。日本の落とした影の中で栄光と転落をつぶさに味わった人でした。

---

『砂漠が町に入り込んだ日』著：グカ・ハン／訳：原正人 リトルモア／2020年

冒頭の作品のタイトル「ルオエス」とは、SEOUL（ソウル）を逆から読んだ町の名前。実在しない不思議な町にぐいぐい迷い込むことから始まるこの短編集は、韓国生まれの著者が後天的に身につけたフランス語で書いたものです。母国語ではない言葉で書くことによってむしろ思いがけない風景が開け、都市と人間、世界と個人の接点がかつてない解像度で迫ってきます。一言では言えない魅力がすみずみまで詰まった1冊。

『**チェクポ——おばあちゃんがくれたたいせつなつつみ**』著：イ・チュニ、キム・ドンソン／訳：おおたけきよみ 福音館書店／2019年

1970年代の韓国の農村を舞台に、おばあちゃんが作ってくれたチェクポ（伝統パッチワークの布の風呂敷）をめぐる少女たちの友情を描いた絵本。チェクポは単なる道具ではなく、「昔の子供たちの喜びと悲しみとたくさんの物語を抱きとめてくれる」存在なのだそうです。女性から女性へ伝えられた知恵と真心と美のかたちが胸に染み込みます。

『**韓国映画・ドラマ わたしたちのおしゃべりの記録**』著：西森路代、ハン・トンヒョン 駒草出版／2021年

『パラサイト』『はちどり』『愛の不時着』。韓国エンタメについて、気鋭の社会学者とライターのお二人がしゃべりつくした7年間の記録。読むにつれ、7年の間に日本もどんどん変わったことが実感できます。社会性と娯楽性のハイブリッド、ジェンダーや階層への配慮など、韓国映画・ドラマの特徴の数々は、韓国文学にも大いに通じるところがありますね。

『**クモンカゲ——韓国の小さなよろず屋**』著：イ・ミギョン／訳：清水知佐子 クオン／2019年  
「クモンカゲ」とは、クモン（穴）のカゲ（店）という合成語で、ちっちゃなお店という意味です。今はスーパー、コンビニに押されて減ってしまったけれど、かつて韓国の随所にあった素朴なお店たちの姿が、しみじみと美しいイラストと文章で綴られています。韓国の人々の心の原風景が伝わってきます。

『**女ふたり、暮らしています**』著：キム・ハナ、ファン・ソヌ／訳：清水知佐子 CCCメディアハウス／2021年

30代半ばで知り合い、共同名義でマンションを購入してローンを返済しながら一緒に暮らしているキム・ハナとファン・ソヌ。「シングルでもない結婚でもない、分子式家族」として生きる彼女たちのライフスタイルが同世代の女性に広く支持され、日本語版も人気を集めています。血縁関係でも婚姻関係でもない、友情と信頼に基づく暮らし、プラス猫つき。親しみやすい文章にすてきな写真多数の楽しい本です。

巡回予定

センター横浜 7/16～8/10 ・ センター横浜南 8/13～9/16 ・ センター横浜北 9/21～10/31

齋藤真理子さん  
トークイベント  
開催決定！

10/10 14:00～  
齋藤真理子さんトークイベント  
**キム・ジョンと私たち**

【齋藤真理子さん】韓国語翻訳と編集執筆。「82年生まれ、キム・ジョン」訳者。  
最新刊『もう死んでいる』二人の女たちと』（ハク・ソルメ、白水社）。  
『カステッ』（ハク・ミンギュ、ヒョン・ジェフンとの共訳、クレイン）＜第一回日本  
翻訳大賞＞



アートフォーラムあざみ野にて開催 詳細・申込は8月頃お知らせします  
10/23 映画「82年生まれ、キム・ジョン」上映会も開催決定！